

平成二十五年四月十七日 場所主義連続講演 第四回

「場所主義について 2」

公益財団法人和敬塾 理事長 前川 正雄

皆さん、こんにちは（塾生「こんにちは」と返事）。これで塾生の皆さんとの話は四回目になります。今回も皆さんと質疑応答をしながら、いろいろな問題の解決とまではいかないまでも、考えるヒントがあればいいなと思っております。塾友の先輩方もみえておりますので、一緒に質問に答えていきたいと思っております。ひとつよろしくお願いします。

毎回お話していますが、私はもう十二年くらいヨーロッパに住んでおります。年に二回くらい日本に帰ってきます。だいたい桜の咲く頃と紅葉の頃あたりに一ヶ月ぐらいずつ帰ってきます。なぜ一ヶ月かというと、実は秋田犬を飼っております。これが留守の間に一割も痩せてしまうんですね。私の犬は三〇キロぐらいですが、日本に帰っている間に二七、八キロぐらいになっておりました。どんどん痩せてしまふんです。そんなことで十二年間、いつも一ヶ月しか日本にいられないようになって

ております。実は一番心配なのはその秋田犬の件で、仕事のほうはあまり心配しておりません。

そんなことでヨーロッパにおりますと、日本がいろいろな意味でよく見えます。よく「どのように見えるんだ」と質問されませんが、やはりこの前も申しあげたとおり、日本はどんどんまともな方向に軌道修正しているという気がつくづくいたします。これは、アメリカとヨーロッパとの比較において、ということですが、アメリカとヨーロッパは、右と左、金持ちと貧乏人、極右と極左というように、社会がどんどん割れています。そのために都市は荒廃しております。その大きな原因は、中間層がいなくなったことですね。なぜ中間層がいなくなったかという点、製造業が衰退しているからです。そして流通と金融とサービス業だけになっていきます。たとえばパナマやアルゼンチンなど、サービス業を中心とした国では、中間層がいなくなったために次々と

問題が浮き彫りになっていきます。ヨーロッパでも同じ傾向があります。そこへもってきて移民が多くなっていますので、都市の荒廃がものすごく進んでいます。すでに大都市の中心部では、夜は出歩けない、非常に犯罪が多い。東京や大阪のような日本の大都市から見ると、考えられないほど治安が悪化し、街も汚くなっている。こんな状態が続いております。

ヨーロッパは社会としても衰退に向かっていくといえます。一方、日本は、ときどき私が帰ってきますと、ますます都市はきれいになり、交通は便利になり、問題点はどんどん解決され、社会としても国としても健全な方向にむかっているのがわかります。

こういう話を申しあげると、「少し甘すぎるのではないか」「日本はもつとひどい状態になっているよ」とおっしゃる方がいますが、それは前の政治（二〇〇九年から二〇一二年にかけての民主党政権）がひど

かったということがいえると思います。ところが、あのひどい政治でも、産業は全然影響を受けていないのです。輸出は伸び、外貨は蓄積され、開発は進み、先ほど申しあげたように社会はどんどんきれいになっています。そういう意味では、政治と産業、政治と社会のつながりが切れてきたということがいえると思います。おそらく二十世紀は、もつと政治と社会のつながりが切れていくでしょう。社会活動の中のほんの一部が政治、ということになっていくでしょう。政治のウエイトは二十世紀に比べてどんどん小さくなっていきます。したがって、日本でどういう政党が何年間政治を担当しようと、実際の国民生活には大して影響がないというのが実態なわけです。おそらくアメリカとヨーロッパでも、政治のウエイトは小さくなっていくだろうと思います。そういう意味では、日本は最先端の社会構造になっているのです。

それと同時に、産業という視点からみますと、やはりサービス業・金融業のウエイトが小さくなり、製造業が復権を始めているというのが私の実感です。ヨーロッパ・アメリカの製造業は衰退しています。自動車といえば、フランス、イタリア、イギリスといった国の自動車メーカーはどんどん潰れていくだろうと思います。ドイツのベンツ、BMWというのは事故率が非常に高くなっています。といいますのは、現場で働く技能工がどんどん減っているのです。そのために組み立て品質が悪くなっているということがいえると思います。

そのようなことで、製造業はどんどん日本に移っていくでしょう。現に、工作機械を含めた産業機械、資本財産業では、日本の強い分野が増えています。アメリカのボーイング社がトラブルを起こし、飛行機の納期が何年か遅れているという話は皆さんもご存じのとおりですが、おそらくアメリカには飛行機をつくる力がないのだと思います。戦闘機のF-35というのも納期が遅れているといいますが、あれも（製造業の盛んな）名古屋でつくらないと完成しないのではないかと思います。私は飛行機のことにはわかりませんが、従来の産業、製造業の実態からみると、すでにアメリカはそういうものをつくる力を失っている、そういう気がいたします。特にハイテクに関しては、二十一世紀中に「見るものがない」という状態になるのではないかと考えています。

そのなことを考えながら、ヨーロッパで仕事して生活しているのですが、ただ、ヨーロッパのよい点がひとつありましてね。それは市場の方向性という点です。どういうことかという点、アメリカでどんなに実績をあげても、その成果はヨーロッパでは通用しない。ところが、ヨーロッパで通用している業績はアメリカですぐ通用する。ラテンアメリカ、アジアでもすぐに通用する。しかし、アジアでいくらナンバーワンになっても、ヨーロッパでは全然通用しない。そのように、「ヨーロッパからアメリカ・アジアには行くが、その反対はない」という方向性が、市場にはあるのです。

私の会社でも、ヨーロッパで食肉冷凍機械を売りだし、それが流通するようになると、アジアと日本にもパッと広がる、ということがありました。そのように、やはりヨーロッパを中心としたヒエラルキーは残っています。それに沿った情報系列、人脈ができあがっております。これは日本の産業人が見落としがちな点です。安ければよいわけではないんですね。おそらく、二十一世紀中はこの方向性が残るでしょう。しかし二十二世紀頃には少し変わってくるだろうと思います。

というのは、中近東、中央アジア、北アフリカといったヨーロッパの周辺の国々は、ほとんどがアンチ・ヨーロッパですね。

実は、できるならば製品は日本から買いたいと思っている国がほとんどなのです。それだけヨーロッパは、歴史的にそういう国々を搾取してきた、富を吸いあげてきたわけです。それがこういう結果になっていると思います。今度のボストンのテロ（二〇一三年ボストン・マラソン爆発事件。講演会の二日前に発生）なんかも、なぜやったのかはわかりませんが、とにかく欧米というのは嫌われているわけです。今後、欧米は経済的にどんどん落ちていきますが、ASEAN、中央アジア、ラテンアメリカ、北アフリカといった周辺諸国は経済発展が進んでいきます。おそらく、欧米が沈んだ分以上に、そういう国々が上がってくるだろうと考えております。

だいたい、私がヨーロッパからみた世界の見方はこんなところですか。あらかじめいくつかご質問をいただいておりますので、それにお答えしたいと思います。今の話を聞いて何かありましたら、ぜひ質問してください。どこからでもどうぞ。

●質問（乾寮二年・大脇君）
理事長のおっしゃっている「場所」は、西田幾多郎の「場」と違う気がするのですが、いかがでしょうか。

■回答
「場所」というのは一人ひとりもっている世界なんだよね。二つとして同じものはないわけです。その自分の世界で、きちつと環境——「場所」に合わせて「棲み分け」をしていくというのが、今西錦司（いまにしきんじ、一九〇二年～一九九二年。文化人類学者、日本の霊長類研究の創始者）の「棲み分け」という考え方です。それぞれが環境にいちばん適応した生き方をする、答えはひとつだけになって、無競争の共存状態になる。それが棲み分けの理論です。したがって、「場所」というのはその個体と環境から出てくるものであって、「『場所』」というのはこういうものだ」という普遍的な話はないのです。

「自分」と「自分が生かされている場所」の関係は、二つと同じものはないわけです。それは人に説明しても通用しないし、しても意味のないことです。それよりも、自分がいったいどういう場所に生きているのか、どういう場所に生かされているのか、

それは今後どのような方向にむかうのかを考える。その上で、人がどういう生き方をしているのか、これも人に聞くより自分で見る。自分で見て判断していく。それで自分の「場所」を深めていくということ以外に、「場所」という問題を知る方法はないと思います。

したがって、もし「『場所』」とはこういうものだ」という話をするとしたら、それは浅い表現になると思います。それよりも、自分の生きざまの中に沈殿しているものを見る。そこでもって感じる、考えること、それが「場所」なのです。

生物というのは、自分の生活圏、生活している場所、生かされている場所で生きている。それは二つとない世界であり、それを普遍化することはできないのです。

●質問（乾寮二年・大脇君）
理事長のおっしゃる「場所」と、西田のいう場所的論理は違うということですか。

■回答
西田の世界は西田の世界、私の世界は私の世界。

●質問（乾寮二年・大脇君）

前回の講演で「西田幾多郎の場所的論理を勉強しておけ」と言われて勉強したのですが、それは違うということですか。

■回答

いや、それはあくまでも西田の「場所」を参考にして、君の「場所」を深掘りするための道具なんだよね。君の「場所」を深く知るといことが「西田を勉強しろ」ということの意味なんだよ。

●質問（乾寮二年・大脇君）

では、理事長のおっしゃる「場所」というのは、西田幾多郎の「場所」とは違うもので、自分で発見しろということですか。

■回答

そのとおり。

●質問（乾寮二年・大脇君）

和敬塾は、アメリカのボーディングスクール（寄宿制中等教育機関）やイギリスの大学のカレッジ（学寮）を参考にしているという話を聞きましたが、実際にうまく機能しているとは思えません。留年している人も多く、活発な議論が起きている

ということもない。なぜ、このようなことになってしまったのでしょうか。

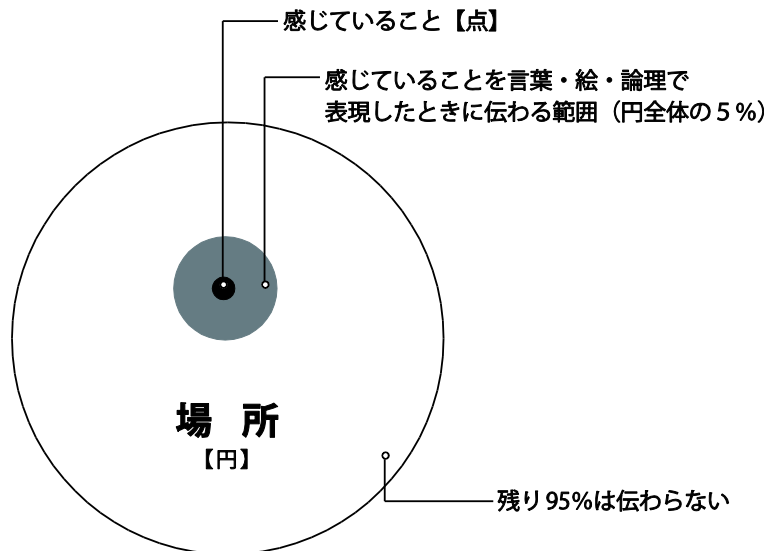
■回答

アメリカのボーディングスクールの「場所」と、和敬塾の「場所」は根本的に違うと思うんだよね。どこが違うかというと、アメリカの「場所」と日本の「場所」の差だと思います。

日本の「場所」というのは、共同体をベースにした社会なのです。「場所」の中でお互いが深く知りあつていく。知りあうためには言葉を使うわけですが、その人が使う言葉には背景があるわけです。「この人がこう言うときは、こういう考えがあるんだ」、これを読みとることを「感覚知」といいます。共同体というのは、「感覚知」を共有する集団です。

図で説明するとうようになります（下図）。

【円】があります。この【円】が「場所」です。誰かが何か感じていることがあるとします。それが【円】の中の【点】です。感じていることを伝えるために、言葉や絵、論理でもって【点】を表現します。しかし、【点】は【点】だけで独立しているわけではなく、【円】の中にあるものです。つまり、本当に言いたいことは【円】なのです。



【円】を踏まえて【点】を感じているんだと言いたいのです。【円】を感じることが出来るのは、共同体以外ではありえないわけです。おそらく、言葉などで表現しただけでは、言いたいことは一割くらいしか伝わらないのではないのでしょうか。残りの九割は伝わらないわけです。そうすると、「場所」に含まれていたもののうち九割は捨てることになる。

この九割を捨てるかどうかは、共同体の質にかかっています。アメリカ・ヨーロッパと日本では、この共同体の質が圧倒的に違うのです。私が前から申しあげており、これが実は日本のハイテク技術の元になっていくのです。

どうして共同体の質がハイテク技術の元になるかというと、たとえば製造ラインにモノが流れていくとします。ラインには必ず問題点があります。この問題点が【点】です。この問題点を見て「あれ、何かおかしいな」とハツと思うわけだよ。「ハツと思う」というのが、西田のいう「純粹経験」に近いです。言葉になる前の経験だよ。この「ハツと思う」ところが、機械屋と電気屋と制御系では違うわけです。これを全部集めないと、問題点の実体【円】が見えてこない。ところがこの実体【円】は直接表現することができない。言葉やボディランゲージで【点】を伝えるしかない。そのときに【円】が見えてくるかどうかは、共同体の質によるわけです。共同体の質がコミュニケーションのアウトプットを決めるのです。

アメリカ・ヨーロッパと日本のコミュニケーションの質の差は歴然ですよ。アメリカ・ヨーロッパでは、会社が終わったあ

とに「今日は一杯飲みにいこう」というのは一人もいません。みんな終わったとたんにさっと帰ってしまう。日本人は、さっと帰る人もいるだろうけども、帰らないで一杯飲む人のほうが多いでしょう。それは共同体の質を高めるためです。そういうことをやりながら、「あの人がああ言ったときは、背景にはああいうことがあるな」と感じるわけです。それが「感覚知」なのです。コミュニケーションでは「感覚知」が九五%を占めます。言葉などの「論理知」は五%しかありません。その五%で残り九五%を伝えようと思うと、共同体以外では伝わらないわけです。

ですから、アメリカのボーディングスクールと和敬塾とは、狙いがまるつきり違うのです。和敬塾が「共同生活を通じた人間形成」といつているのは、感覚知を共有する共同体づくりをめざしているからです。創立からだいたい六十年経ちました、その成果も大いにあがっています。また、もっと成果をあげなくちゃならない、そしてきつとあがっていくだろうと思います。

●質問（乾寮二年・大脇君）
これからの教育というのはどうあるべきだと思われませんか。

■回答

これはもう完全に「共同体の質」です。学校の勉強はどうでもよいと思います。「共同体の質」を上げる力をつける。学校の勉強、「論理知」はいつでも身につきます。バカでも時間をかければ身につきます。ところが、「感覚知」、共同体の知、共同体の質というのは、今ここでなければ身につかない。これが一番大事だと思います。

●質問（乾寮二年・大脇君）

日本の製造技術がどんどん上がっているという話がありました。僕の考えでは、昔から日本はずっと技術志向で、戦後は技術技術技術でやってきたと思います。

ですが最近、アメリカやイギリスは、技術志向よりアイデア志向、ビジネスモデル志向にむかっています。「イノベーションを起こそう」といった考え方もそうですが、どちらかというと技術よりアイデア・知の力を重視し、手を使わないで頭だけでやっていくようなやり方が主流になってきているように見えます。

そうすると、これからの日本の立場は、アメリカから「こういうビジネスモデルがあるから日本はこれを製造してね」といわれるような、言い方は悪いですが、アメリカ

カ・ヨーロッパに言われるがまま操られて製造だけをやっていく国になりかねないと思います。理事長はこれについてどのようにお考えですか。

■回答

それはまるつきり反対ですね。というのは、これから出てくるものは、おそらくほとんど日本からしか出てこないと思います。ハイテクを含め、あらゆるものが日本からしか出てこない。ボーイングじゃないけども、もし本当によいモノをつくらうと思ったら、日本でつくらなくてはダメです。なぜかという、結局、共同体の質なのです。

ボーイング社が飛行機をつくっている現場で、「これはおかしいな」と思った人はいっぱいいたはずなんだよね。でも、伝えようとしなくて。伝える必要がないわけだよ。伝えたらどうなるかという、「そんなことやめておけ。おまえはよけいなことをしているから、給料を減らす」と、こうなるわけです。これで共同体ができるはずがない。よいモノができるはずがない。二十世紀は機械屋だけの「感覚知」でモノができました。ところが二十一世紀は、機械屋と電気屋と制御系と哲学者と坊さ

ん、いろいろな人が必要なハイテクになっている。このハイテクを実現できるものは、日本の文化、「寄りあい」の文化、共同体の文化以外にないと私は思うんですね。

したがって、アメリカのビジネスモデル、これはもうほとんど通用しなくなっています。というのは、論理的に考えられているビジネスモデルというのは、誰にでもできるからです。インドでもマレーシアでもどこでもできる。世界はそういうものを求めているのではない。その集団からしか出てこない社会的価値、こういうものが要求されているのです。そうすると、共同体の質が大切になってきます。論理で伝えなくても、いきなりアウトプットとして伝える世界です。二十一世紀はこういうものしかハイテクとして認めないのです。

ですから、アメリカのビジネススクールでいっていることはほとんど通用しません。日本の製造業でアメリカのビジネススクールを出た人がいるという話は私は聞いたことがないですよ。使いものにならないから。金融や流通ならよいですが、おそらく日本ではメインの産業にならないでしょう。

●質問（北寮三年・河越君）

前回の講演で、これからはデジタルからアナログにシフトしていくとおっしゃいました。しかし、現に私たちはインターネットのような、経験よりも情報が多く受けとられる世界で生活しています。アナログ化というのがどのように進むのかをおうかがいしたいです。

■回答

デジタルの世紀は終わった。これからはアナログの世紀が始まる。これは何かという、結局「共同体の質」なのです。

デジタルというのは誰にでも伝わる情報です。その代わり【円】の広いところ——「場所」全体のことは全然伝わらないわけです。

製造ラインを見ている機械屋と電気屋と制御系が、「なんかこのラインおかしいな」と思って議論を始める。それが全部集まったときに実像が出てくる。機械屋だけが見た実像というのはほんの一部ですから、それを全部合わせて初めて実像が浮かびあがる。そのときに製造ラインの改善策が出てくるのです。

これはデジタルではない、アナログの世界です。言葉はデジタルです。言葉が伝え

ようとしている背景はアナログです。したがって、私はコンピュータの時代はもう終わったと言いたいです。

アナログの世界では、製造ラインの例のように集まって議論する人間はだいたい四人か五人です。何十人もに情報を伝えても、その情報はほとんど使いものにならない。コンピュータでメールを送るでしょう。ほとんど読みませんよね。読んでもそこから得るアナログの感覚知はゼロです。一対一で会わないとダメです。会って話していると、言葉や身ぶり手ぶり、声の大きさなどで、話している言葉以外のものも伝わります。

コンピュータで十人二十人に送っても、その情報はほとんど使いものにならない。今、コンピュータのデータ処理に原子力発電所五十基分の電力が要するというけど、あれはムダだと思えます。

●質問（北寮三年・河越君）

前回の講演で、日本の製造業が製造ラインを考案するべきだとおっしゃいましたが、リチャード・ローズクランズ (Richard N. Rosecrance, 1930-) という政治学者の『バーチャル国家の時代』という本にも似たような議論がありました。

ローズクランズは、デジタルの世界がさらに高度になり、世界が「製造の仕組みを考えるクリエイティブ層」と「製造を担う層」に分かれることで、国家同士が相互依存するようになる」と述べていますが、理事長はデジタルがアナログに転じるとおっしゃっています。これについてどう思われますか。

■回答

デジタルの計算機を百倍にしてもアナログにはなりません。

おそらくアメリカはアナログの世界を諦めているから、デジタルで行くしかないんですね。あの連中はそれで行く以外ないと思っているのですが、あれはいくらやっても意味がありません。おそらく今世紀中には、アメリカもヨーロッパもほぞを噛むことになると思えます。

たとえば、京大の人が発見したiPS細胞というのがありますよね。あれなんかは完全にアナログです。話を聞いてみると、若い数名の人のコミュニケーション能力、いかなれば「現場力」なのです。二十一世紀のハイテクはそういうものです。

大きな電算機を使って分析や計算をしても、全然意味がないのです。だから君た

ちは、ぜひそのところをもう一度よく考えてもらって、「デジタルの時代は終わったんだ」「ひよつとしたら終わったんじゃないか」「アナログの世界というのは共同体の中でどういう機能をもっているのか」と考えてもらいたい。これは共同体で生活する場にはないと感じられないことです。ぜひ和敬塾で感じてもらいたい。

デジタルはアメリカにまかせておけばよいのです。ろくなことができませんから。むしろ我々は、アナログでもって徹底的に特徴を出していく、「棲み分け」をしていくほうがよいと思えます。

●質問（乾寮四年・穴澤君）

デジタルの時代は終わったかもしれませんが、必要だと思われませんか。なくすべきなのですか。

■回答

いやいや、そうではなくて、デジタルの世界があつて、その上にアナログの世界が積みあがつていくんだね。だいたい、世の中に出てきたもので不要なものというのはまずないんだよね。何か存在価値があるわけです。ただ、それだけでは世界が回らなくなっている。その次の新しい世界をつ

くっていかなければいけない。そういうところ君たちは入ってきている。

●質問（南寮三年・安岡君）

「場所主義」の理想形として、「寄りあい」に似た、組織の構成員全員が納得するような議論を行う組織があるとおっしゃいました。しかし、それはやはり理想であり、今の日本での実現は難しいと思います。この点についてはどうお考えですか。

■回答

ナットク（納得）とセットク（説得）という言葉があります。

セットクというのは1+1=2です。これは反論のしようがないわけです。ところが、1+1=2ではない世界が実は大きい。九五%を占めています。1+1=2はたかだか5%以内です。そのほかの世界は全部1+1が3になったり5になったりする。いわゆる「論理知」の世界から「感覚知」の世界へ、デジタルからアナログへ、といったような世界です。

二十一世紀、これまではデジタル全盛でした。したがって、機械だけでも問題が解決できた。ところが、今後アナログになると、機械から電気から哲学から宗教から文

学から、全部が関係してくる。そうすると1+1は2ではないんだよね。その代わり、共同体の質によっては1+1が5になったり10になったりするわけです。それがハイテクなのです。それが、共同体の質のアウトプットです。

そのときの一番の問題点がナットクとセットクですね。セットクというのは1+1=2。これは動かしようがない。だけど、これ以外の部分が大きいのです。ここところをどうやって理解していくか。1+1が3や5になる場合には、いったいどういう合意をとっているのか。

これは「寄りあい」しかない。これは日本人が縄文以来やっている合意のとり方です。「寄りあい」では、三日三晩、徹底的に話しあいます。「寄りあい」が行われるのは、たとえば農村ですね。農村の水の分配方法の問題なんて、これはナットクする以外にありません。まずいくつかのグループに分かれて議論し、あとでそれぞれのグループのリーダーが集まって全体の議論をします。そういうことで三日三晩かけます。三日三晩かけると、誰もが「ああ、これでいこう。これがよい」と思う答えが出ます。これがナットクの合意形成システム、いわばナットクシステムです。「あな

たのところがかうだからこうしなさい。去年はこうだからこうしなさい」とセットクしても、ナットクできない。

ナットクする場所、これが共同体です。共同体がないところはナットクできないのです。そうなるとパワーでやってしまいう以外ない。したがって、管理システムやビジネスモデルというかたちになつてくる。日本の場合にはそうではなくて、全員が「よし、これでいこう」と合意する。これは実は非常に難しいシステムなんだよね。

では、和敬塾は君たちが本当にナットクしたシステムになつているのか。おそらくなつていないと思うんですね。ですから、努力しながらナットクするシステムをつくっていく、体験していく。これが和敬塾の「共同生活を通じた人間形成」のなかで一番大事なものだとは私は考えています。

日本人のもつ文化的なDNAというのは、欧米の文化的DNAと大きく異なります。それが典型的にあらわれているのが、ハイテクの開発分野や製造業です。二十一世紀にもう一度大きくなるとしたら製造業ですね。製造業は必ず日本が中心になつて進んでいくと思います。また現にそういうかたちになりつつあります。

共同体から得るものは何なのか、それは

君の一生をどういうふうに決めるのか、そしてそれが日本と世界にどういう貢献をするのか、君たちにはぜひ考えてもらいたいと思います。

●質問（南寮・川崎君）

前回の講演で、戦後、マツカーサーが壊したものが三点あるとおっしゃいました。そのうち一点が旧制高校であり、実学以外のものを教える教育システムだったとおっしゃっていました。

しかし、大陸由来の合理的な思考や実学なしに、製造業のようなモノづくりを実現するのは難しいのではないのでしょうか。その点についてお聞かせください。

■回答

これは、先ほどお話しした、デジタルの社会の上にアナログがついてくるという話です。

今まで人間がつくったものでムダなものはありません。それは必ず有用なものです。ただし、それだけでは世の中はまわっていかない。世の中の環境、社会がどんどん進化している。それに沿って新しい対策を打ちださなければならぬ。今、その時代に入っています。

合理的なシステムの上に非合理のシステムがついて、一緒になって問題を解決していく時代に入っています。どちらかひとつではなく、両方やらなければならぬ。その相反したものを合成する力がナットクシステムです。セトクではできません。「デジタルとアナログが一緒になるなんてありえない」——その「非合理の合理性」というものを、旧制高校では共同体を通してつくりあげていました。

マツカーサーが潰したものは三つです。ひとつは日本の教育制度です。旧制高校を潰した。旧制高校というのは、共同体をリードする人間をつくる三年間なのです。学校では何も勉強しません。哲学とか宗教とか、そういうことばかりやっている。それで寮生活を通して共同体をつくっていく力をつける、これがエリートなのです。したがって、第一高等学校で盗みがあったとすれば、寮長がこれはこういう不届き者だからと退寮を命ずる。そうすると学校が、その退寮を受けて退学を命ずる。寮が中心なのです。そのように、共同体の生活の場というものを非常に大事にしていました。これをマツカーサーが潰してしまったわけです。和敬塾はもう一回それをやろうと思っています。

もうひとつは家族制度を潰した。三つ目は天皇制を潰した。今、天皇家では深刻な問題が起こっていますね。後継ぎをどうするかという問題ですが、あれは完全に仕組まれたわけです。

これから和敬塾で何をやらなければならぬかということは、生活を通してみんな議論して深く考えてもらえばいいと思います。

●質問（西寮一年・川崎君）

政治が社会から乖離していくというお話でしたが、そうなったときのメリットとデメリットについて詳しくお聞きしたいです。

■回答

政治というのは必要悪なのです。なければいけない方がいいわけです。

昔の日本の「寄りあい」社会に政治があったかといえ、あつたことはあつたんだらうけども、非常に抑制された、小さなものであつたはず。それがあまり大きな顔して大道を闊歩する社会は、むしろハッピーじゃない社会ですね。ですから、昔のそういう状態に帰っていくのは非常によいことだと思います。まず、それが大きな

メリットではないだろうか。

政治というのはセトクシステムです。ナットクシステムではないですよね。もう一度、ナットクシステムに帰る必要があると思います。それは政治ではなく、モノづくりのように生活に密着した部分だろうと思います。

●質問（西寮一年・田中君）

理事長のおっしゃっていることは、自分の理解できた範囲では、これまでの西洋主導の近代合理主義からの脱却と、「これから新しい世界をつくっていく」という話だと思っています。

その上で、「日本にこそ、これからの社会の礎となる話し合いのシステムがある」とおっしゃいましたが、そういった話し合いのシステムは、日本に限らず、西洋近代の考え方の範疇の中にあまり入っていない他の共同体にもあると思います。たとえば太平洋の島国、アフリカのサハラ以南の民族などです。

ですから、話し合いというのは人類の根底的なものだと思うのですが、それについてどう思われますか。なぜ日本に限定するのですか。

■回答

確かに、アメリカ大陸のインディアンとかポリネシアとか、こういう国は話し合い文化がベースになっています。ただこれは、外部から侵入されたことがないという条件があります。外部から侵入されたことがあると、話し合いは話し合いでもディベート文化になる。「寄りあい」のナットクシステムをベースとした社会とディベート社会とはまるつきり違うのです。

残念ながら、アメリカ・ヨーロッパはディベート社会です。だから、はじめから合意しようとは思っていない。喧嘩しようと思っているわけです。これで「寄りあい」ができるわけがない。完全合意になるはずがないのです。

ただ、ペルーにしてもメキシコのアステカにしても、スペインに征服されたたんにものすごく悲惨な目に遭うわけですね。日本のハッピーな点は、ああいうことが一回もなかったことです。これは世界史では珍しいことです。他にはないのではないかと。日本だけではないか。イギリスも、フランスやバイキングに何回か占領されていますよね。あとの国はほとんど蹂躪されています。

ひどいのは、モンゴルやサラセン、トル

コ、マレーシア、中国といった大陸国家です。こういう国の攻め方は、皆殺しです。こういう国と日本は明らかに違います。たとえば、中国にはこんな処刑方法がある。手足を沙漠に固定して、洗面器をひとつ入れる。その中にネズミを一匹入れておく。ネズミが食って死刑になる。そういうことは日本だと考えられないですよ。いわゆる大陸国家というのは、そういう非常に激しいことをやるのです。日本とは対極にあると思います。

いろいろ段階はあるのですが、やはりほとんどの国は侵略されていると考えた方がいいのではないのでしょうか。ポリネシアなども侵略されたことがないでしょうね。したがって、非常に穏やかな文化が今でもあると思います。

●質問（西寮一年・田中君）

西洋が非西洋を侵略するのと、非西洋同士あるいは非西洋が西洋に侵略するのは、まったく違うと思います。もつとえば、近代と近代以前では、侵略の仕方、あるいは侵略後の統治の仕方が違うと思います。

そう考えると、近代的な侵略を受けていない国家は日本だけではありません。その

上で、「日本が他の大陸文化よりも穏やかである」「穏やかであることがよい」と考えるのは、おそらく日本人であるがゆえのパスpekティブにすぎないのではないかと思います、いかがでしょうか。

■回答

日本は山国ですから、小さい集団がいっぱいあるわけです。小さい集団の中で濃密な共同体文化をつくっていく。そういうところは、港にしても、山の里にしても、外部の人が来ると非常に歓迎します。

ところが、中近東にしるアジアにしる、ヨーロッパにしる、外部の人が来たときにはまず身がまえます。日本はマレビト（外部の人）を全部受け入れ、話をよく聞いて歓待して帰します。日本は外部の人から学ぶ文化だと私は思います。これは、はじめから拒絶する文化とは明らかに違って居るわけです。ところが、大陸侵略国家というのは、まず自衛しなければ自分が殺されてしまうから、そうせざるをえないわけです。その差はものすごく大きい。

●質問（西寮一年・田中君）

日本のマレビトと、大陸国家が侵略しあうこととは、次元が違う話のように思いま

す。

たとえば、イスラームの国のことを考えると、「旅人が来たら喜んで迎え入れなさい」とコーランに書かれています。それは日本のマレビトに近いものではないでしょうか。逆に日本でも、特に江戸時代だと思いますが、村社会というものは非常に閉鎖的で排他的なのではないでしょうか。理事長のおっしゃっていることは、納得できないところがあります。

■回答

たとえば、中近東でキャラバン同士が出会う。もし二つのキャラバンが並行して歩いたら戦争になってしまう。どちらかが全滅するまで殺しあう。すれ違うだけならよい。そのように、ともかく沙漠の世界は殺すか殺されるかという緊張度が強いのです。もうベースがそうなっている。だいたい沙漠は生きている世界ではない、生物がいる世界ではないわけです。そういうところで人間がラクダに乗ってくるというのは、非常に危険な状態であることには間違いありません。

もちろん、日本でも閉鎖社会はあります。共同体でも、たとえば家元の社会なんているのは非常に閉鎖的です。共同体の中には、

開放系の共同体と閉鎖的な共同体と、いろいろなものがあると思うんだよね。

君たちにはぜひ、自分たちの共同体の「場所」を見ながら、開放系の「場所」をつくっていくということを経験してもらいたいと思います。

●質問（教育文化研究所・石坂武司）

先ほどボーディングスクールの話が出ましたが、ボーディングスクールを卒業した大学生は、ヨーロッパの大学でどのように共同体の勉強をしているのでしょうか。

■回答

和敬塾の諸君にぜひよく考えてもらいたいことがひとつあります。それは、日本の共同体というのは、非常に自然な共同体だということ。したがって、「寄りあい」にもなる、完全合意もできる、「ナットクシステムもできあがってくる。ただ、欠点のひとつある。それは、身内で固まってしまうということ。したがって、外部とうまく付き合うといえますか、いわゆる社交術については、日本人はなっていないですね。このところは、ヨーロッパに学ばなければならぬ。

ヨーロッパの連中は、自分の本心をいか

に殺して有利な状態にするかという政治性に長けているわけです。それがひとつの外交になつていくのです。このところを、日本人はもう一度よく考えてもらいたい。そうなれとは言わんけども、そういう社会があるということを知ったうえで、そういう社会に行ったらそういう行動をとるということをぜひやってみてほしいのです。

日本に帰るとつくづく思うのは、テレビなんかで、頭はまるでボサボサ、「よくこんなのが出てくるな」と思うようなアナウンサーが出てきますよね。アメリカ・ヨーロッパのアナウンサーというのは、そりゃ歳もとっているんだろうけれども、いかにもそういう政治性のよさ、外交的なよさがあつて、外部への対応が非常にうまいという感じさせます。

日本人がこれからグローバル化していく場合に、ぜひ身につけなければならないことだと思えます。

●司会

そろそろ一時間を過ぎましたので、講演会は終わりにしたいと思います。ありがとうございました。(拍手)

※場所主義についての刊行物

場所主義連続講演

第一回 塾誌和敬第九十号

第二回 別冊和敬第四十一号

第三回 別冊和敬第四十二号

ご興味をお持ちの方は、合わせてお読みください。